

# 開拓情報

発行所  
 公益社団法人全国開拓振興協会  
 〒102-0093 東京都千代田区平河町1-2-10  
 TEL 03-6268-9995  
 FAX 03-6268-9996  
 ホームページ http://www.kaitakusya.or.jp  
 全日本開拓者連盟・全開連・全国開拓振興協会共同編集

## 〈今月の紙面〉

- ・「食料・農業 知っておきたい話」-114 (2面)
- ・21年度「日本型直接支払」実施状況 (3面)
- ・農産物、農業「気にかける」約4割 (4面)
- ・イノシシの秋季出沒に注意 (5面)
- ・小澤さん(長野)精密飼養管理ソフトを活用 (6面)
- ・子牛の飼料給与に工夫を (7面)
- ・畜産物需給見通し (8面)

## 畜酪緊急対策

# 配合飼料10、12月期ト 6750円交付

## 酪農家の国産粗飼料利用も支援

政府は9月20日、飼料価格高騰の影響を受けている畜産・酪農経営の負担を軽減するため、22年度予算の予備費から504億円を支出する(1)を閣議決定した。飼料価格高騰緊急対策事業を措置し、生産コスト削減や飼料自給率向上に取り組むことを事業参加要件として、生産者に補てん金を交付する。

飼料価格高騰緊急対策 度第3四半期(10～12月) 配合飼料1ト当たり6750円を交付する。

高騰対策と、購入粗飼料 価格安定制度による補てん金とは別に、生産コスト削減等に取り組む生産者に対して補てん金を交付し、実質的な飼料コストを第2四半期(7～9月期)と同程度の水準とする。

配合飼料価格の高止まりによる生産者の実負担額増加を抑制する。22年

【補てん単価】 ①生産コスト削減に資するメニュー(国産飼料の生産・流通拡大、国産

飼料の給与割合の増加、疾病・事故率の低減(など)、②配合飼料の使用量低減に資する取り組みメニュー(飼料成分分析に基づく飼料設計の改善、国産高栄養粗飼料の利用、自動給餌機等による適量給与(など)から1つずつ選択し、実践する。

【交付タイミング】 事業実施主体(農畜産業振興機構)に対して交付申請手続きが行われた農協等を通じ、生産者に11月以降、順次交付予定。

【要件】 前記①及び②のメニューから3つを選択し、実践する。ただし、国産飼料の生産・流通拡大、国産

緊急酪農対策 74億円 今年4月から乳価改訂が行われる11月の前月までの間のコスト上昇分の一部を補てんする。都府

## 「49歳以下」4年連続2万人割れ

### 21年新規就農5年連続5万人台

農水省は9月30日、21年新規就農者調査の結果を2月1日現在の結果を公表した。新規就農者は5万2290人で、前年に比べ2.7%減少した。

新規就農者を男女別にみると、男性が3万950人で前年比1.9%増、女性は1万2750人で14.7%減。うち49歳以下は、男性が1万2880人で0.5%減、女性は5540人で2.0%増となっている。就農形態別にみると、個人経営体の世帯員で、「学生」や「他に雇われ」を割り込んだ。農業従事者の減少傾向が続いている中、若年層の新規就農者の確保が喫緊の課題と

者」は8.0%減の3万6890人、うち49歳以下は14.8%減の7190人で、それぞれ大きく減った。新規学卒就農者は8000人で、全体の2.2%と少ない。一方、60～64歳は8700人、65歳以上は1万7130人で、それぞれ全体の23.6%、46.4%を占めている。

新たに法人等に常雇い(年間7カ月以上)として雇用され、農業に従事することになった「新規就農者」は7.0%増の3830人、うち49歳以下は4.3%増の2690人

## 新規就農者数の推移 (就農形態別)

区分	計	就農形態別						
		新規学卒就農者		新規雇用就農者		新規参入者		
		49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	49歳以下	
2014年	57,650	21,860	46,340	13,240	7,650	5,960	3,660	2,650
15	65,030	23,030	51,020	12,530	10,430	7,980	3,570	2,520
16	60,150	22,050	46,040	11,410	10,680	8,170	3,440	2,470
17	55,670	20,760	41,520	10,090	10,520	7,960	3,640	2,710
18	55,810	19,290	42,750	9,870	9,820	7,060	3,240	2,360
19	55,870	18,540	42,740	9,180	9,940	7,090	3,200	2,270
20	53,740	18,380	40,100	8,440	10,050	7,360	3,580	2,580
21	52,290	18,420	36,890	7,190	11,570	8,540	3,830	2,690

で、それぞれ2年連続で増の1万1570人、うち49歳以下は16.0%増の8540人で、それぞれ2年連続で増加した。

新規学卒就農者は2270人で、全体の19.6%。なお、農家出身が1480人(うち新規学卒就農者3000人)に対し、非農家出身は1万1000人(同1970人)で、全体の87.3%を占めている。

土地や資金を独自に調達し、農業経営を開始した経営の責任者及び共同経営者である「新規参入者」は7.0%増の3830人、うち49歳以下は4.3%増の2690人

が1310人と最も多く、次いで果樹作が790人、施設野菜作が650人となっている。

## 農業基本法見直しへ

### 農水省、検証部会を設置

農水省は9月20日、食料・農業・農村政策審議会を開催。野村哲郎農水大臣が食料・農業・農村基本法(以下「基本法」)の検証等に関する意見を求める諮問を行った。基本法は、農業政策の

基本的な方向を示すものとして、1999年に制定された。基本理念として、①食料の安定供給の確保、②多面的機能の十分な発揮、③農業の持続の高まりなどの今日的な課題に対応していく必要

を掲げている。食料自給率の向上を図ることも規定されている。

## 会員と一体となり 生産・販売事業展開

### 全開連22年度事業計画案

全国開拓農業協同組合連合会(全開連)は10月28日、東京・赤坂の三倉ビルで第74回通常総会を開催する。総会に先立ち、10月4日に全開連会議室で北海道・東北・関東・中部関西地区の、10月6日には熊本県人吉市で九州地区の「事業概況説明会」を開催。総会提出議案が会員に説明され、意見聴取が行われた。

提出議案は、第1号議案「第74年度(21年8月1日～22年7月31日)事業報告、貸借対照表、損益計算書、注記表、剰余金処分(案)及び附属明細書承認について、第2号議案「第75年度(22年8月1日～23年7月31日)事業計画設定について、第3号議案「第75年度理事及び監事の報酬について、第4号議案「退

任理事に対する退任給与金の支出について、第5号議案「定款の一部変更について、第6号議案「任期満了による役員選任について」の6議案と付帯決議案。

第2号議案で示される「第75年度事業計画(案)」では、会員と一体となつて生産・販売事業を展開するとしている。基本方針は次のとおり。

〈基本方針〉  
 (1) 開拓地における酪農・畜産事業は、日本国民の食文化の一翼を担うべきであり、本会は今後とも日本の畜産業の維持・発展のために会員と一体となつて取り組み、開拓組織の「顔の見える畜産専門連」の見える畜産専門連化

本紙は無償で提供しています。ご希望の方はお知らせ下さい。



# これ以上放置できない農村現場の苦境

東京大学教授 鈴木宣弘氏

**最悪の事態が起こる**

一昨年に比べて肥料2倍、飼料2倍、燃料3割高と言われるコスト高でも、十分に価格転嫁できない農畜産物。政策も動き始めたが、酪農については「追い討ち」的な乳価の暴落などで現場の苦境は深刻化している。

そうした中、ついに最悪の事態(北海道の酪農家が自殺)に接し、無念と無力感にさいなまれる。政府の緊急補てん乳製品による人道支援、急いでほしい。皆一丸となって国産乳製品を賣おう。酪農家さん、踏ん張って下さい。国際需給は逼迫で各国の乳価、乳製品価格も上昇し、日本酪農の重要性は高まっている。今をしのげば必ず未来は拓ける。

## 知ってほしい話

第114回

2022年度の都府県の需給(見通し) (千トン)

	生乳供給量		飲用等向処理量		生クリーム等向・チーズ向		A-B-C	移入量(道外移出量)D	脱脂粉乳・バター等向		
	A	前年比	B	前年比	C	前年比			前年比	前年比	
4月	291	100.4%	285	99.4%	6	104.8%	1	31	99.6%	32	108.4%
5月	297	99.8%	302	98.6%	5	101.9%	-10	37	102.1%	27	119.4%
6月	277	99.9%	300	97.0%	5	101.5%	-27	43	90.5%	15	139.1%
7月	272	100.5%	298	100.3%	5	103.5%	-31	48	104.6%	17	116.9%
8月	259	97.7%	278	97.4%	5	100.0%	-24	49	107.8%	25	124.2%
9月	255	98.5%	297	98.7%	5	100.0%	-46	55	97.2%	9	83.6%
10月	268	99.3%	301	98.9%	5	100.0%	-38	49	96.8%	10	99.5%
11月	262	98.9%	270	95.5%	6	100.0%	-14	35	92.3%	21	146.2%
12月	275	99.3%	259	94.4%	6	100.0%	10	32	91.4%	42	133.3%
1月	281	99.9%	264	92.6%	5	100.0%	11	37	109.3%	49	198.2%
2月	260	100.0%	252	94.3%	5	100.0%	3	33	96.3%	36	164.9%
3月	295	99.7%	265	93.6%	6	100.0%	24	32	103.9%	56	149.5%
上期	1,652	99.5%	1,759	98.6%	31	102.0%	-138	263	100.1%	126	115.4%
下期	1,641	99.5%	1,612	94.9%	32	100.0%	-3	218	98.0%	215	152.7%
年度計	3,293	99.5%	3,371	96.8%	63	101.0%	-141	482	99.1%	341	136.4%

# 牛乳等生産量3.1%減に下方修正

## Jミルク22年度 需給見通し 生乳は4年連続で増産

Jミルクは9月30日、22年度の生乳・牛乳乳製品需給見通しを公表した。7月までの生乳生産量は、7月までの生乳生産量と見込んでいる。

22年度の生乳・牛乳乳製品の需給見通しを公表した。7月までの生乳生産量は、7月までの生乳生産量と見込んでいる。

22年度の生乳・牛乳乳製品の需給見通しを公表した。7月までの生乳生産量は、7月までの生乳生産量と見込んでいる。

推定して予測。牛乳類(牛乳、加工乳、成分調整牛乳、乳飲料)が3.1%減の448万8千ポンド、乳製品は7.7%減の94万6千ポンドと予測。それぞれ2.6%、3.7%下方修正した。

生乳生産量から自家消費量を差し引いた「生乳供給量」は、0.6%増の763万9千ポンドの見込み。北海道からの移入量(道外移出量)は、0.9%減の48万2千ポンドと前年を下回る見通し。

農水省は9月30日、バター及び脱脂粉乳の22年度輸入枠数量の検証結果を発表した。今年1月に翌年度分を示し、5月設定した輸入枠数量を据え置き、9月に検証を行うこととしている。

22年度の輸入枠数量は、WTO(世界貿易機関)で約束している数量(カレント・アクセス、生乳換算で13万7千ポンド)とし、5月の検証では据え置いた。

Jミルクは、「業界内外を巻き込んだ幅広く一体感を持った消費拡大が求められる」と指摘している。

22年度の輸入枠数量は、WTO(世界貿易機関)で約束している数量(カレント・アクセス、生乳換算で13万7千ポンド)とし、5月の検証では据え置いた。

### 予備費による政策発動

政府は、予備費から、搾乳牛1頭に都府県1万円、北海道7200円の緊急支援を決定した。関係者の努力の結果ではあるが、1頭当たり年間乳量を1方kgとして乳価に換算すると、生乳1kg当たり都府県で1円、北海道では72銭で、配合飼料が30円/kg上昇している現状には遠く及ばない。特に、11月からの飲用乳の取引乳価が10円/kg上がった。加工向けが8割を占めるため、2円しか上がらない北海道の不満も大きい。飼料費の高騰に応じた支給なので、自給飼料が相対的に多い北海道への支給が低くなったことである。

今日で、ジャージー牧場の廃業清算の知らせです。コンサルで関与する牧場で、廃業される牧場の牛と搾乳機材などを引き取る相談でした。見通しのつかない不安と資金繰りが限界を迎えているようです。

生産抑制で前年比10.1%を越えた分は集荷しないという話までされているように、搾乳できないのに、これではどうしようもありません。回ってきている普及員さんも、生産抑制を指導するようにならざるを得ない状況です。

農協によつては、処理不能乳が出る状況に近いこと、生産抑制を強めていると聞きます。子牛暴落、餌、資材高騰、さらに搾れないでは八方塞がりです。強い人ばかりでは無いので心配です。

### 農村現場から

昨日も畜産団地にあった隣接する3戸のうち唯一残っていたホルスタイン牛の酪農牧場の廃業の知らせを聞きましただけで、毎月増え続けるこれ以上の負債を抱えることに廃業を決定されたのでした。今日は

現場からの声が続々届く。酪農家族に絶望感が広がっています。酪農家族に絶望感が広がっています。酪農家族に絶望感が広がっています。酪農家族に絶望感が広がっています。

### 消費者からも心配の声

国は何とかなしようと思わないのでしょうか? 食料は大変な国防、軍備だけが国防では無いのです! ミサイルよりも先に考えなければならぬことです。スーパーに食べ物がない、食料不足が心配です。

### 農水省、輸入枠数量据え置き

農水省は9月30日、バター及び脱脂粉乳の22年度輸入枠数量の検証結果を発表した。今年1月に翌年度分を示し、5月設定した輸入枠数量を据え置き、9月に検証を行うこととしている。

### 食料安全保障推進財団からの呼びかけ

筆者が理事長を務める食料安全保障推進財団に、一番沢山の拠出をして下さっているのは、今ご自身が一番苦しい酪農家の皆さんだ。身につまされる思いである。クラウドファンディングができないかとの提案もある。

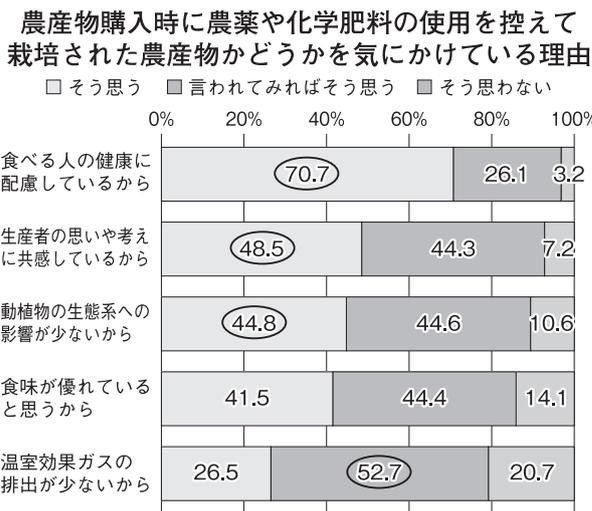


# 農産物、農薬「気にかける」約4割

## 「一般食品と価格同等なら購入」5割

日本公庫

（株）日本政策金融公庫は、環境に配慮した農産物・食品の結果を公表した。全国の20〜70代の調査（22年7月）特別調査。全国の20〜70代の調査（22年7月）特別調査。全国の20〜70代の調査（22年7月）特別調査。



高く、おおむね高年代で高い傾向だった。「気にかける理由」は、「図のとおり。食べる人の健康に配慮しているから」などで割合が高い。「購入についての考え」は「一般食品と同等の価格なら購入したい」が50.3%、「時々であれば少し割高でも購入したい」が34.2%で両者で過半数以上を占めている。年代別にみると、60、70代は「時々であれば少し割高でも購入したい」がそれぞれ44.3%、43.2%で4割を上回った。

一方、20代は「価格を気にせず購入したい」が7.2%で他世代よりも高い傾向がみられた。「購入促進のために、消費者が生産者や食品企業等に期待する取り組み」は、「大いに」「やや」を合わせた「期待する」は、「過剰な包装・サービスを行わない」が77.3%、「量り売りでの販売や規格外の農産物・商品も積極的に提供する」が71.4%、「子供から大人まで消費行動が高い傾向がみられた」。

### 野生鳥獣ジビエ利用18%増

#### シカ947トで販売量トップ 21年度

農水省が9月22日に公表した「21年度野生鳥獣資源利用実態調査結果」によると、ジビエ利用量に約18%増加し、中でもシカは食肉販売量で947トと最も多かった。食肉処理施設が21年度に処理した解体頭・羽数は14万4896頭・羽で、前年度から7.9%増加した。

種類別にみると、シカは9万9033頭（15.4%増）、クマ・アナグマは1324トで11.7%増えた。種類別にみると、シカが947ト（27.5%増）、クマ・鳥類などは1万6197頭（増）、クマ・鳥類などは16,197頭（増）、クマ・鳥類などは16,197頭（増）。

### 鳥獣種別の捕獲方法別解体頭・羽数

区分	解体頭・羽数			
	計	網	わな	銃器
計	144,896	14,866	85,729	44,301
イノシシ	29,666	427	24,433	4,806
シカ	99,033	1,720	58,822	38,491
その他鳥獣	16,197	12,719	2,474	1,004

20ト（33.3%増）、イノシシが357ト（16.4%減）などとなっている。また、捕獲した野生鳥獣の捕まえ方は表のとおりだった。

イノシシは、網・銃器の効果の少なさなどが影響してか、捕獲頭数・利用量ともに減少している。

### 田畑計耕地利用率0.1ポイント上昇

#### 21年麦類・野菜など増加で

農水省が8月31日に公表した「21年農作物作付面積は220万ヘクタールで、前年並みだった。麦類（子実用）が4千ヘクタール増え、野菜などは4万3600ヘクタール増え、乾燥子実）は400ヘクタール減少した。耕地利用率は93.0%で、前年から0.1ポイント上昇した。

田畑計の作付（栽培）延べ面積は397万7千ヘクタールで、前年並みだった。麦類（子実用）は6800ヘクタール増、野菜などは3万4千ヘクタール増、稲（子実用）は2800ヘクタール減少した。一方、水稲（子実用）が5万9千ヘクタール減少したことなどから、耕地利用率は前年から0.2ポイント上昇し、89.6%となった。

# 志津図書館（佐倉市）で展示開催

## 戦後開拓された新しいまち『上志津原』

千葉県佐倉市の南西に位置する、千葉市、八千代市、四街道市に三方を囲まれた「上志津原」は、戦後開拓された地域である。近隣に位置する志津図書館で今年7月に1ヵ月間、「戦後開拓された新しいまち『上志津原』」と題した展示が行われた。展示の内容を上志津原の歴史を含めて、紹介する。



志津図書館での展示の様子

当時開拓に動いた開拓者や地域の住民で構成される上志津原町のメンバーのうち、開拓者が当時の開拓の苦労をインタビューで伝えた。上志津原は上志津から分離する形で「上志津原」という地名が付いた地域で、旧陸軍の下志津原演習場の一角だった土地に開拓団が入植した。軍用地であったことから土が固く質も悪く、開拓の作業は困難を極めた。開拓者たちは野草はもろろんのこと、へびやカエルも食料にし、飢えをしのいだという。地域をのびのびと取り組むことができた開拓者の悲願の初収穫はサツマイモだった。

拓の作業は困難を極めた。開拓者たちは野草はもろろんのこと、へびやカエルも食料にし、飢えをしのいだという。地域をのびのびと取り組むことができた開拓者の悲願の初収穫はサツマイモだった。

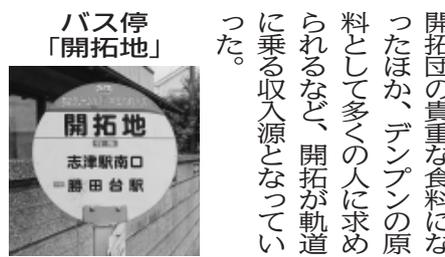
映像の資料もなつた、開拓一世の長谷川定房さんが執筆した「上志津原の生い立ち」などを基に同町会が詳しく調査した資料が展示された。開拓農家からの聞き取り調査を基に上志津原在住の郷土史家である宮武孝吉さんが執筆した「歩いてみよう 志津史跡・いまむかし」なども展示された（写真上）。



写真はすべて志津図書館提供

この他にも、開拓団が植林した防風林を活用し、99年9月に佐倉市が遊歩道として整備し、「上志津原ふれあいどおり」と名付けた通りの写真も展示された（写真下）。同町会が中心となり維持管理している遊歩道は、地元の愛や地域の団結力を持つ「ふるさと上志津原の象徴」として、四季折々の花々が彩る小路となっている。

全国的にも珍しい、非常に詳細な戦後開拓の概要をホームページで発信し続ける町会は戦後開拓の先人の努力を誇りにしている。



バス停「開拓地」

また、現在も上志津原には「開拓地」というバス停があり、戦後開拓された町であることに開拓農家

非常に詳細な戦後開拓の概要をホームページで発信し続ける町会は戦後開拓の先人の努力を誇りにしている。

すぐにたべるなら、手前をえらぶ。

『てまえどり』にご協力ください。

食品ロスゼロをめざして

みんなで目指そう、地球にやさしいお買い物。

消費生活 農林水産省 環境省

「てまえどり」は、東京・千葉・埼玉・神奈川・茨城・香川など、多くの県が独自の啓発物を作成。同省など関係機関と連携し、取り組みを自治体レベルで進めている。

### 10月は食品ロス削減月間「てまえどり」で廃棄防止を

農水省は9月29日、10月の「食品ロス削減月間」、10月30日について「全国一斉商習慣見直しの日」の啓発活動を発表した。食品ロス削減の啓発ポスターの作成③10月の「食品ロス削減月間」、10月30日について「全国一斉商習慣見直しの日」の啓発活動を発表した。食品ロス削減の啓発ポスターの作成③10月の「食品ロス削減月間」、10月30日について「全国一斉商習慣見直しの日」の啓発活動を発表した。食品ロス削減の啓発ポスターの作成③

# 地形の凹凸に合わせ柵すき間なく イノシシの秋季出没に注意

秋季は野生鳥獣による農作物被害が多く発生する時期である。20年度の農作物被害額は161億円で、うち3割近くがイノシシによるものとなっている。その対策の重要な点を確認したい。

### エサ場を作らない

収穫しない野菜・間引いた株などの収穫残さ等を農地に放置せず、埋設などで適切に処理する。収穫しないで地面に落下した果実はこまめに回収する。放任果樹は地域で合意の上、伐採を検討する。農家や集落だけで収穫で

きない果樹は、ボランティアを活用し、剪定・収穫する方法がある。収穫物をボランティアに持ち帰ってもらうことで、農家や地域だけでは消費しきれない収穫物の有効利用もできる。

被害を受けた農作物もそのまま放置せず、埋設などの処理をする。また、生ごみやくず野菜などをたい肥代わりに農地に放置するのは避け、コンポストなどを利用し、たい肥化する。

### 隠れ場所を作らない

耕作放棄地は隠れ場所になったり、

田畑への侵入口になるため、草払いなどを行い見通しの良い環境を維持する。見通しの良い場所は住処になりにくい。耕作地周辺のヤブ払いを集落全体で取り組み、野生動物が侵入しにくい環境を作り出す。

### 防護柵設置のポイント

侵入はほとんどが潜り込みを原因とするため、地際にすき間を作らないように心がける。柵は定期的に点検や除草等の管理を行う。突破されてもあきらめずに補修や補強を行う。

電気柵を設置する場合、皮膚が剛毛のため確実に鼻にあたるように柵線を設置する。高さは20・40cmを保ち、地形の凹凸に合わせて支柱を追加する。罫子(電線を支えるための器具)は外

側に向け支柱と柵線は接触しないようにする。

ワイヤーメッシュ柵の場合、効果や設置のしやすさ、設置後の管理などの検討をしてから設置する。線径は5mm以上、目合いは10cm以下とし、横筋をほ場側にして設置する。結束線は腐食に強いステンレス製を選び、固定する位置は地際から10・40・70cmの3ヵ所を基本とする。地際を掘り返されないよう地形の凹凸に合わせてすき間なく張る。

地際部の補強には、ワイヤーメッシュに角材などを当てて直角に曲げたものを固定すると効果的。上部を折り曲げ忍び返しをつけると飛び込み対策になる。

# りん茎肥大期・倒伏期にかん水

## 秋まきタマネギ収量向上

タマネギ栽培では、生育期間中に水分が不足すると小玉になりやすく、極端な高温・乾燥条件が続く場合には収量低下を招く恐れがある。

そこで、福島県農業総合センター作物園芸部野菜科は、秋まきタマネギ栽培においてりん茎肥大期～倒伏期にかん水すると収量が向上することを試験により明らかにした。

### 方法

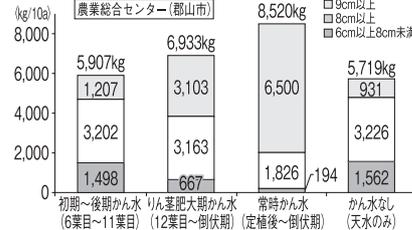
試験は19年と20年に同センター内のほ場(郡山市、標高218m)で行った。畝幅120cm、株間10cm、条間20cm、通路幅90cmとし、10月下旬に4条植え

で定植した。20年の試験では、かん水量の違いによる収量の差を調べた。供試品種はもみじ3号を用いた。

### 結果

土壌が乾燥した場合、常にかん水することで、天水のみの場合と比べて収量が増加した。特にかん水の効果が高

かん水時期の違いによる収量の差(2019年)



したSOPを作成、9月14日に公開した。

今回のSOPは、ハダニの増殖が顕著で薬剤抵抗性が深刻な施設栽培向けに、〈W天〉防除体系を実際に導入するうえでの手順や留意点をまとめたものである。

果樹の施設栽培は多様であり、天敵利用技術は樹種や栽培方法、園地の環境により大きく変わる。そのため、安定した防除効果を得るためにそれぞれの地域や環境に適応した体系の調整・アレンジが必要であり、その一助となるよう、SOPは基礎から応用にわたって必要な情報を提供している。

施設編のI章では、〈W天〉防除体系の基本構造や導入における留意点について解説。II章ではブドウ栽培、III章ではミカン栽培で、それぞれに対応した〈W天〉防除体系の構築から個別技術の導入や実践までのノウハウを解説し、モデル体系や導入事例を紹介。IV章には、カブリダニに対する各種殺虫剤・殺ダニ剤、殺菌剤の影響を網羅したリストが掲載されている。

かん水時期・かん水量の違いによる収量の差(2020年、農業総合センター)

かん水時期・かん水量	規格内※1合計収量 (kg/10a)	かん水量※2 (ℓ/m)	かん水回数
10葉～12葉期適量かん水	5,510	108.8	3
10葉～12葉期1/2量かん水	5,557	51.1	3
10葉～倒伏期適量かん水	6,568	135.0	5
10葉～倒伏期1/2量かん水	5,863	64.6	5
12葉～倒伏期適量かん水	6,157	48.1	2
12葉～倒伏期1/2量かん水	5,254	24.0	2
かん水なし(天水のみ)	4,712	-	-

※1 規格内合計収量は正常球(収量調査時、外部分球、裂皮、腐敗のないもの)のうち販売規格に該当する6cm以上のもの規格内合計収量=(規格内平均球重(g)×26.667(株/10a)×(規格内球率/100))/1,000(栽植密度26.667株/10aは株間10cm、条間20cm、畝間150cm、4条/畝から算出)

※2 栽培期間中、1m当たりにかん水した合計かん水量 ※図表ともに福島県農業総合センターの資料から

12葉～倒伏期に2回かん水することで、5回かん水した場合と収量の差はありません。

い時期は、りん茎が肥大し始める頃(12葉出葉以降～倒伏まで)で、この時期だけかん水した場合でも大玉率が向上し、天水のみの場合と比べて収量は1t/10a以上増加した(図)。

同センターは、常時かん水の場合が最も多く収穫できる結果となったが、多大な労力がかかることから、作業にかかる労力を考慮すると、りん茎肥大期～倒伏期まで(同県では5月中旬～6月上旬頃)にかん水を行うのが効率的であるとしている。また、かん水量の違いによる試験結果から、1回当たり12～24ℓ/m程度のかん水量で収量

の向上が期待される(表)。

同センターはこの技術を取り入れる場合の留意点として、水源が近くにあること、散水チューブを用いるため水質によっては目づまり防止フィルターが必要なこと、エンジンポンプが必要であることを挙げている。また、気象条件など同様の環境であれば他県でもこの技術を適用することが可能としている。

なお、この試験は「農林水産省・食料生産地域再生のための先端技術展開事業(JPJ000418)」により実施されたものである。

## 農研機構 ダブル天敵標準 作業手順書公開 施設ブドウ・ミカンが対象

高温乾燥の条件下で多発しやすいハダニは、増殖が早く、化学合成農薬に対し薬剤抵抗性を発達させやすいため、防除効果の補完を目的とした農薬の追加散布が常態化している。新規薬剤も、開発スピードが薬剤抵抗性の発達に間に合わなくなることが懸念されており、持続性や労力軽減の観点から新しい防除技術が求められてきた。

そこで、農研機構を代表とするグループは、果樹園に自然に生息する土着カブリダニと製剤化されたカブリダニを活用し、殺ダニ剤への依存を大幅に減らした新しいハダニ防除体系「〈W(ダブル)天〉防除体系」を確立した。

この体系を現場に導入するための標準作業手順書(以下、SOP)として、これまでに「基礎・資料編」「リンゴ編」「ナシ編」の3編を作成、公開してきた。今回、新たに「施設編」としてハウスブドウ・ミカン栽培を対象と

る。 多大な経済的被害を招くことが知られている。土壌消毒剤の使用を低減しつつ効率的に土壌病害を管理するためには、ほ場単位で栽培前に土壌病害の発生しやすさを診断し、対策を講じる「ヘソデ

ィム」が有効とされている。そこで、農研機構と共同研究機関は、野菜生産で問題となる10種の土壌病害を対象に、ほ場ごとの発生しやすさをAI(人工知能)で診断できるアプリ「HeSo+ (ヘソプラス)」を開発、製品化した。

このアプリは、被害が問題となっている主要な土壌病害であるアブラナ科野菜根こぶ病、ネギ黒腐菌核病などを対象に、AIがほ場の発病ポテンシャルレベルを診断し、結果に応じた対策法などが提示されるように設計されてい

る。 発病ポテンシャルを診断するAIは、栽培地域・方法が異なる多くのほ場から収集されたデータを基に開発されている。対象病害ごとの正確度(対策を行い、防除が成功した割合)を実証試験で検証した結果、73.6～86.5%の範囲となり、実用可能な水準であることが確認されている。

診断は、アプリ内マップ上で対象のほ場を選択し、提示された項目の情報を入力することから始まる。AIが発病ポテンシャルを診断し、マップ上でポテンシャルレベルを色別に3段階で表示する。診断結果に応じて利用者の目的に適した推奨する対策技術も提示されるようになっている。

同アプリは既に販売が開始されており、一般的な利用であれば年間利用料は6000円(税別)となっている。

農研機構 ほ場ごとの土壌病害リスクを示す AI土壌診断アプリ配信開始

## 小澤さん(長野)精密飼養管理ソフトを活用 全国酪農青年女性 酪農発表大会

全国酪農青年女性会議と全酪連は、7月14～15日、ホテルイースト21東京(江東区)で「第50回 全国酪農青年女性 酪農発表大会」を開催。2人の戦後開拓農家が発表した。

今月号では、そのうちの1人、関東甲信越地区代表・小澤雄太さん(35歳)の発表「更なるSTEP UPを～常にチャレンジ精神～」を紹介する。

### ～牧場の歴史～

雄太さんが代表を務める「株式会社小沢牧場」は、長野県中部に位置する上伊那郡南箕輪村にある。中央アルプスなどの名峰を望み、標高は800m。雄太さんの祖父・宗幸さん、祖母・かほるさんが、1946(昭和21)年ごろに戦後開拓地「大芝地区」に入植したのが

始まり。営林署に寝泊まりしながら開拓に励み、52年に1頭の乳牛を導入。主に養蚕、タバコ、加工トマトなどを栽培。73年に牛舎を建て、酪農専業へと転換した。

雄太さんが就農したのは15年4月。故郷の食品会社で業務に励んでいたが、父・敏雄さん(64歳)の体調や自分自身の心境の変化などから、心機一転、後継者として酪農家になった。

現在は、雄太さん、敏雄さん、母・由美さん(60歳)の家族と従業員1人、アルバイト2人の計6人で、常時3人体制の交代制で営農している。

### ～牧場の特長と今後の目標～

現在は、16年4月に稼働した新牛舎で、経産牛74頭・育成牛47頭を飼養し

ている。小沢牧場の特長は、粗飼料と配合飼料を自動で積み込み・給餌できる自動給餌装置、ミルク運搬の負担を軽くするロボットを導入していること。精密飼養管理ソフトを使ってミルクとフィーダーを連携し、綿密に飼養管理を行っている。

飼料は、自給粗飼料を最も重視している。近隣の農家から借りている草地と合わせて約26haで作付けを行っている。面積は就農当時から3割増え、今年度は新たに6ha増える予定。量だけでなく、品質にもこだわり、毎年8月に行われる県の自給飼料共励会に必ず出品している。

乳質改善セミナーで学んだ知識を牧場メンバー全員で共有し、体細胞数を10万前後に抑えることに成功している。また、消防団活動や大芝地区の祭りにも積極的に取り組み、地域と共生



写真は上下とも全酪連の資料から

することを大切にしているという。

雄太さんの今後の目標は、分娩間隔380日を目指すことや、全体の乳量をアップさせること、自給粗飼料の収量アップと品質の向上を図ること。牛を長く健康に飼い、輸入乾牧草に頼らない酪農を徹底していきたい考えだ。

祖父母の代から受け継いだ牧場をさらに良くしながら守るため、雄太さんは日々工夫を凝らしている。



## 中酪「後継者働きやすい環境を」 酪農経営の早期改善に向けて

コロナ禍や世界情勢の混乱が、酪農経営に深刻な影響をもたらしている。(一社)中央酪農会議(略称「中酪」)は9月22日、「酪農経営の早期改善に向けて～外的要因に影響を受ける酪農をめぐる情勢～」を発表。酪農家が直面している危機を改めて分析した。

### ○コロナ禍、ウクライナ侵攻、円安の打撃止まらず

日本酪農の危機的状況を「コロナ禍での需要減少」「飼料価格の急激な上昇」など4項目に分けて分析している。生乳生産量の回復途上にあったタイミ

ングで襲いかかったコロナ禍による打撃は現在も続いている。「プラスワンプロジェクト」などにより処理不可能乳の発生は防ぐことができたが、円安が9月に入って140円台にまで進行。

輸入飼料・資材の価格が為替の影響で急騰している。コロナ禍での船の運行への影響やコンテナ不足など海運状況の混乱から、配合飼料・粗飼料とも急騰。粗飼料価格は、ロシアによるウクライナ侵攻と円安のダブルパンチで、22年度の予測値(8月時点)は前年比33.1%増とさらなる上昇が見込ま

れる。

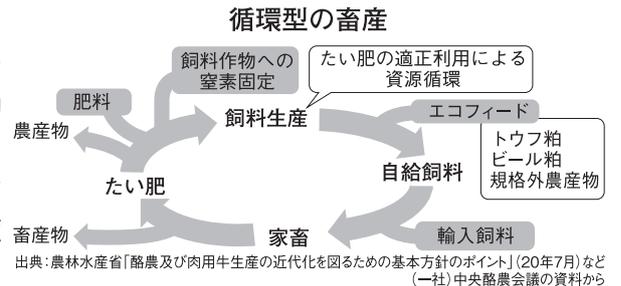
酪農の多面的価値をさらに増進、後継者の働きやすい環境整備を

耕作放棄地を草地にするなどの取り組みが、傾斜地などの効率的に利用

することが困難な土地の活用を進め、資源循環や国土保全・景観形成につながる。取り組みがより推進されていくことで、図のような循環型の酪農を実現し、酪農を持続可能な産業として盤石にすることが望まれる。

また、畜産・酪農経営の約6割は、45歳未満の担い手を確保している。後継者となる若年層が働きやすい環境を作れるよう、就農を支援し、農業生産基盤を確保することが重要となる。

(公財)日本農業研究所の矢坂雅充研究員はインタビューで、輸入飼料に依存する体制は為替や世界的な穀物相場の影響を大きく受けやすいと指摘。



出典:農林水産省「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針のポイント」(20年7月)など(一社)中央酪農会議の資料から

食料は安全保障と直結するため、世界は牛乳・乳製品をほぼ自国内で消費しており、輸出に回る量は多くない。輸入に頼ってまかなうという想定は現実的でなく、自然環境を守ることなど、酪農を営むことのような価値を消費者に訴えかけていくことが重要とした。

また、需要が伸びていても輸入品に市場を取られているチーズに着目することが重要と指摘。中長期的にはバター・脱脂粉乳にチーズを加えた乳製品市場を核に、過剰とひっ迫に耐えられる生乳需給調整システムを構築すること、長期ビジョンを持った農業政策が重要だと訴えかけた。

## 衛生管理徹底で 豚熱<sup>な</sup>と侵入回避を 22年度越境性動物 疾病防疫対策会議

農水省は9月28日、「22年度越境性動物疾病防疫対策強化推進会議」を省内で開催した。冒頭、野村農水大臣は、現在欧州でアフリカ豚熱が流行していることを共有し、日本国内の養豚農家では豚熱ワクチンを接種していても感染している状況の深刻さを伝えた。「ワクチンを打っていても、日々の飼養衛生管理をくれぐれも徹底してほしい」と強く訴えかけた。

### □人間が持ち込まない

豚熱発生農場で、飼料や衣服・長靴、一輪車などの車両により人間が外部からウイルスを持ち込んでいることがサンプリング調査で分かった。消毒・交換・洗浄などの防疫対策を常に徹底し、人間が持ち込むことを防止する。



### □野生動物を入れない

ネズミのふんなどからも検出されているが、同省の調査で、豚舎内を堂々と歩く野良ネコが確認されている。壁がなかったり、ネットが十分に設置されず、侵入されるすき間がたくさんある豚舎が依然多いことから、設置を強く呼びかけている。

また、外から入って来るカラスなどの野生鳥獣は、すべてウイルスを持ってきていると認識して厳しく対処することが重要。特に、草刈りや整理整頓、ネットや屋根などの破損部位の修繕などを重点に、対策を徹底することが呼びかけられた。

## 帰ってきた!! 日井の養豚 ワンポイント管理

5年に一度の第12回全国和牛能力共進会が、鹿児島県において今月上旬に開催されました。

養豚においても昭和の頃は生体を集めた全国共進会が開催されていました。1980(昭和55)年の第9回大会に群馬県から出品され、内閣総理大臣賞を受賞した大ヨークシャーが素晴らしく、芸術品のようなことが思い出されます。

この大会は84年の第10回大会以降、豚オーエスキー病等の伝染病が国内で発生したことを受け、生体の共進会は残念ながら行われなくなりました。

立秋を過ぎ、日が短くなり、朝晩は急に涼しくなり、肌寒さを感じる陽気となりました。豚舎内の温度の日較差を少なくするとともに、湿度の低下する季節となりますので、湿度管理も適切に行い、子・肉豚の呼吸器疾患を抑えたいものです。本格的な寒さが来る前に、防寒対策の準備を進めておきたいものです。

(全開連参事 日井靖彦)

# 厚めの敷料、ジャケットで体温維持

## 子牛の飼料給与に工夫を

牛は一般的に寒さに強いと言われていたが、成牛に比べ子牛は体脂肪が少なく、体重当たりの表面積が大きいいため寒さに弱い。子牛が寒冷によるストレスを受けるとエネルギー不足に陥り、その後の成長にも大きく影響するため管理の徹底が必要となる。

哺育休息場所では、すき間風が子牛に当たらないように、コンパネやシートなどを張ってすき間を塞ぐ。また、冬場のコンクリート床は冷たいので、ゴムマットを敷いたりベッドを設置することで、寒さやケガを防ぐ。休息場所の敷料を厚めに敷き、こまめに交換することで水や尿による濡れを防ぐのも重要。上に稲わらを敷くことで尿に

よる濡れを防ぎ、子牛のお腹の冷えを回避する方法も有効。フリース素材の子牛専用ジャケットやネックウォーマーを着せて体温を維持するのも効果的だ。

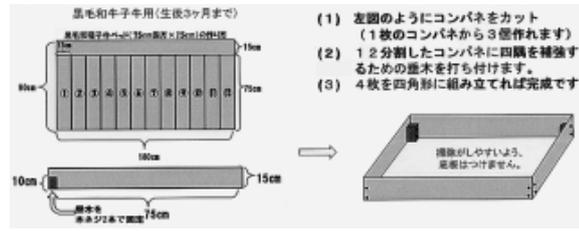
また、冬場は肺炎に注意する必要がある。保温のため牛舎を密閉するとアンモニアがこもり湿度が高くなる。このような環境では、病原体が増殖し、肺炎や下痢の発生につながりやすい。牛舎に入った際に目がチカチカする場合、日中に入り口や窓を開放したり、換気扇で換気を行う。

寒冷時は、特に出生から3週齢までの子牛でエネルギー要求量が増加する。代用乳は脂肪含量の高いものを給

### 子牛のベッド作成

寒さ対策として、子牛のベッドの作り方を岐阜県の資料から紹介する。

このベッドは保温性が高いほか、



★ホルスタイン用は一辺を80cmにして製作する。  
※飛騨家畜保健衛生所の資料から

お尻が枠から少し出る大きさのため、ベッド内のふん尿の汚れを抑えることができる。また、敷料はベッド以外には薄く敷けば良いため大幅な節約にもつながる。

主に群飼を対象に、1頭に1つのベッドを想定しており、黒毛和種であれば最大3ヵ月齢ぐらいまで利用が可能。上下にヒーターを設置し、体を温めることで下痢対策にもつながるため、対策として取り入れたい。

与し、濃度を指標の範囲で濃くするほか、給与回数を増やすことでエネルギーを確保する。また、代用乳給与時の温度が39~40℃となるようにお湯の温度をやや高めにする。

飼料を食い込ませるには、清潔で適

温の水を飲ませることが重要。水飲みバケツの場合、この時期は哺乳後20~30分ほどでぬるま湯を与える。群飼育では、ヒータを使用するなどして水槽の凍結防止を工夫し、点検や掃除をこまめに行う。

# 枝肉成績 BMS No. 以外は同等

## 黒毛和種 肥育3ヵ月短縮

穀物価格の上昇等で配合飼料の価格が高騰しており、畜産経営は厳しい状況が続いている。肉用牛では、肥育期間の短縮を考えたいが、市場における評価は低くなる傾向にある。

そこで、(独)家畜改良センター(福島県西郷村)は18年~20年に試験を実施し、肥育期間の差が枝肉格付や肉質等に与える影響を調査した。

### 方法

センター本所芝原分場内(同村)の肥育牛舎で、生後12ヵ月齢の黒毛和種去勢牛24頭を供試した。

肥育期間を一般的な29ヵ月齢までとした「29ヵ月区(以下、慣行区)」に10頭、3ヵ月短縮する「26ヵ月区(以下、短期区)」に14頭と2つの試験区を設け、18年2月~20年3月にかけて

試験を実施した。短期区が4頭多く供試されているのは、データをより多くとる目的があったため。

短期区は「黒毛和種正常発育曲線」(全国和牛登録協会)の上限値に合わせ、慣行区は29ヵ月齢での目標体重を760kgに設定し、それぞれ月齢に応じた養分要求量をベースとして作成した配合飼料給与メニューに基づき肥育管理を行った。両試験区とも、市販の配合飼料と粗飼料(稲わら)を分離給与した。配合飼料は個々の牛の状態を見ながら1日当たり最大12kgまでの制限給餌を行い、稲わらと飲水は自由摂取とした。21ヵ月齢以降の牛には、毎朝1回ビタミンA(以下、VA)飼料を添加して血中VA濃度低下を阻止するよう努めた。BMS(牛脂肪交雑基準)No.

表1 枝肉格付(歩留等級関連)

試験区	n	枝肉重量	胸最長筋面積	ぼらの厚さ	皮下脂肪の厚さ	歩留基準値
26ヵ月区	14	509.8±34.3	59.4±8.3	8.3±0.5	2.7±0.6	73.8±1.1
29ヵ月区	10	515.7±26.8	62.2±6.6	8.3±0.6	2.6±0.5	74.2±1.1

表2 枝肉格付(肉質等級関連)

試験区	n	BMSNo.	脂肪交雑等級	BCS.No	光沢	きめ	しまり	BFSNo.	光沢と質
26ヵ月区	14	6.1±1.4 <sup>d</sup>	4.1±0.5	3.7±0.5	4.3±0.5	4.4±0.5	4.4±0.5	2.9±0.4	5.0±0
29ヵ月区	10	7.3±1.4 <sup>c</sup>	4.4±0.5	3.9±0.3	4.4±0.5	4.5±0.5	4.5±0.5	3.0±0	5.0±0

※異符号間に有意差あり(c・d; 5%水準)

(表1・2ともに家畜改良センターの資料から)

向上を目的とした過度なVA制限は両試験区で実施しなかった。

### 結果

枝肉格付の結果は表1、2のようになった。歩留等級はすべての試験牛でAとなった。肉質等級のうち脂肪交雑等級は、短期区で4.1±0.5、慣行区で4.4±0.5となり、慣行区でやや高い値となったが、統計的な有意差は認められなかった(表2)。有意差はBMSNo.でのみ認められ、慣行区が短期区よりも1.2程度値が大きかった。慣行区で肉質等級の平均値がやや高くなっているが、同センターは同区におけるBMSNo.の結果を反映しているものだと考察している。

肥育期間が短いとBMSNo.が有意

に低くなるという結果となった。しかし、肉質等級の平均値は両区とも4等級であり、有意差は認められなかった。さらに、これまで肥育期間が短い牛肉で最も心配された「きめ・しまり」についても、両区間で有意差は認められなかった。以上により同センターは、3ヵ月の肥育期間の差は枝肉格付に大きな違いをもたらさず、牛舎回転率も考慮すると増収が期待できるとしている。

留意点として、増給のペースが短期区では特に早いため、対応できず食滞を起こす個体も発生したことを挙げています。その場合は注意深く観察し、無理をせず給与量を下げることに対応したと説明している。

## 乳用・交雑種で連続発動 牛マルキン8月分

農畜産業振興機構は10月12日、肉用牛肥育経営安定交付金(牛マルキン)の交付金単価(22年8月分、概算払い)を公表した。乳用種・交雑種で標準的販売価格が標準的生産費を下回ったため、引き続き交付が行われる。肉専用種は35都道県で発動した。

交付金単価(1頭当たり)は、乳用種が4万3320.8円(前月は3万4380.2円、概算払い)、交雑種は4万1755.7円(同2万9910.8円、同)。

前月分と比較すると、販売価格は交雑種で低下し、乳用種は横ばい。飼料費は両種で増加したため、交付金はどちらも増額となった。

## 外国人技能実習生に通訳機で指導 全国家畜保健衛生業績発表会

農水省は9月29~30日、「第63回全国家畜保健衛生業績発表会」を開催した。その中で、岡山県井笠家畜保健衛生所(矢掛町)の「外国人技能実習生の飼養衛生管理基準遵守意識向上に向けた取組」と題する発表とその取り組みを紹介する。

現在生産者の高齢化や廃業が進んでおり、人手不足を補うため、国籍を問わず、外国人技能実習生の活躍が望まれている。一方で農場が遵守すべき飼養衛生管理基準については厳格化が進んでおり、外国人従業員も理解できるような飼養衛生管理マニュアルの作成

など、さまざまな国籍に対応できる指導方法の確立が求められている。

そこで同家保では、外国人技能実習生とのコミュニケーションツールとして、AI(人工知能)通訳機を導入した。この通訳機は世界62言語に対応しており、音声による双方向の翻訳が可能で、畜産分野における専門性の高い言語にも広く対応している。音声翻訳を使った際、日本語の認識結果と外国語の翻訳結果が画面に表示され、文章化された翻訳履歴はクラウド上に保存され、パソコンでのテキスト編集が可能となる。

この特長を利用し、音声翻訳を活用した意見交換や、出身国に合わせた外国語版資料を提供することにより、飼



※井笠家畜保健衛生所の資料から

養衛生管理基準の理解度が深まり遵守意識の向上を図ることができた。

この取り組みは各農家でも導入できるものである。同家保は、農家自身がそれぞれで導入し、外国人技能実習生と活発にコミュニケーションを図ってほしいとしている。この通訳機は1万円~3万5千円ほどで買

# 畜産物需給見直し

## 牛枝肉

年末の牛肉最需  
要期に向けて、  
荷動きが活発化

9月は大型台風が上陸するなど天候に恵まれなかった。そのため、外食・行楽需要のみならず、小売りの需要も鈍かった。各品種の枝肉相場は、後半には徐々に値を伸ばし、月平均価格は前月を上回った。

【乳去勢】9月の東京市場乳牛去勢B2の税込み平均枝肉単価(速報値、以下同じ)は967円(前年同月比97%)となり、前月に比べ92円上げた。

農畜産業振興機構の需給予測によると、10月の乳用種の全国出荷頭数は2万9600頭(103%)で引き続き前年同月を上回ると見込んでいる。

【F<sub>1</sub>去勢】9月の東京市場の交雑種(F<sub>1</sub>)去勢税込み平均枝肉単価は、B3が1517円(前年同月比102%)、B2は1316円(101%)となった。前月に比べ、それぞれ24円、23円上げた。

同機構は10月の交雑種の全国出荷頭数を2万2600頭(113%)と、引き続き前年同月をかなり大きく上回ると予測している。

【和去勢】9月の東京市場の和牛去勢税込み平均枝肉単価は、A4が2300円(前年同月比100%)、A3は2040円(99%)となった。前月に比べ、それぞれ122円、49円上げた。

同機構は10月の和牛の全国出荷頭数を3万9900頭(98%)と減少に転じると見込んでいる。牛全体の出荷頭数は

9万3600頭(103%)で引き続き前年同月を上回ると予測している。

【輸入量】同機構は10月の輸入量を総量で4万5800t(83%)と予測。内訳は冷蔵品1万6900t(83%)、冷凍品2万8900t(83%)。冷蔵品は、需要の減退や為替相場の影響等から、前年同月を大幅に下回ると予測。冷凍品は、前年同月の豪州産の輸入量が多かったこと等から、前年同月を大幅に下回ると予測。7月からの3ヵ月平均では、より安価な冷凍品の輸入量は、前年同期をわずかに上回ると見込んでいる。

10月から再び、食品の値上げが相次いでいる。消費者の節約志向が一層高まり、牛肉の購入頻度は弱まることが予想される。一方、政府の「全国旅行支援」が始まり、観光需要の回復が期待される。また、年末の最需期に向けて、徐々に荷動きが活発化する。枝肉共進会・共励会の開催が増えてくることもあり、相場は強含みの展開になることが予想される。

向こう1ヵ月の東京市場の税込み平均枝肉単価は、乳牛去勢B2が950~1000円、F<sub>1</sub>去勢B3が1450~1550円、B2は1250~1350円、和牛去勢A4が2250~2350円、A3は2100~2200円での相場展開か。

## 強含みの相場展開に

### 9月の子牛取引状況

(頭、kg、円)

ブロック	品種	頭数		重量		1頭当たり金額		円/kg	
		当月	前月	当月	前月	当月	前月	当月	前月
北海道	乳去	689	724	312	311	121,335	130,225	389	419
	F <sub>1</sub> 去	1,838	1,982	334	342	348,924	314,536	1,045	920
	和去	3,180	2,328	328	336	744,268	741,539	2,269	2,207
東北	乳去	1	-	235	-	96,800	-	412	-
	F <sub>1</sub> 去	2	4	281	289	154,000	233,475	548	807
	和去	2,931	2,348	319	324	659,082	707,760	2,069	2,185
関東	乳去	44	25	337	348	313,925	280,412	932	807
	F <sub>1</sub> 去	158	138	354	362	340,715	368,667	962	1,018
	和去	880	886	310	310	690,304	713,274	2,230	2,304
北陸	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	58	83	308	287	712,174	633,335	2,312	2,207
東海	乳去	5	6	275	286	238,040	238,700	866	835
	F <sub>1</sub> 去	93	50	322	330	344,690	357,962	1,072	1,086
	和去	408	233	274	265	671,245	689,214	2,447	2,601
近畿	乳去	-	-	-	-	-	-	-	-
	F <sub>1</sub> 去	-	-	-	-	-	-	-	-
	和去	415	180	267	259	778,988	702,894	2,921	2,714
中四国	乳去	67	64	282	284	171,173	189,544	606	667
	F <sub>1</sub> 去	266	283	345	335	328,122	341,031	951	1,017
	和去	711	816	298	301	606,409	616,859	2,033	2,050
九州・沖縄	乳去	6	14	286	291	152,167	138,364	532	476
	F <sub>1</sub> 去	399	468	342	341	342,100	352,581	1,001	1,034
	和去	10,902	7,800	302	299	617,537	644,419	2,047	2,156
全国	乳去	812	833	310	310	136,800	140,208	441	452
	F <sub>1</sub> 去	2,756	2,925	337	342	345,173	326,372	1,024	954
	和去	19,485	14,674	308	308	652,195	673,953	2,118	2,188

注：(独)農畜産業振興機構の公表データを基に本紙集計、当月は暫定値。価格は消費税込み、重量・金額・単価は加重平均。一は上場がなかったことを示す。関東ブロックは山梨県、長野県、静岡県を含む。

## 黒毛和種はブロック別で判断

### 肉用子牛緊急対策事業運用見直し

農水省は、6月に措置した「優良肉用子牛生産推進緊急対策事業」(農畜産業振興機構事業102億円)の運用見直し・拡充を行った。

同事業は、今年12月までの臨時・緊急の措置。肉用子牛の品種区分ごとの全国平均価格(月別、税込み価格)がそれぞれに設定している発動基準(A、Bの2段階)を下回った場合、販売頭数1頭当たり1万円または3万円の奨励金が交付される。年内に経営改善のための取り組みメニュー(経営分析(経営管理研修会への参加等)、飼料効率の改善(飼料分析を踏まえた給与设计等)一など8つ)のうち3つ以上行うことが要件。

黒毛和種は、ブロック別の販売価格の差が大きい。このため、運用の見直しを行い、黒毛和種については全国平均価格ではなく、ブロック別

(北海道、東北、本州関東以西・四国、九州・沖縄の4ブロック)の平均価格で発動を判断することとした。

また、「和子牛産地強化計画」を作成した地域において、産地強化に資する前向きな取り組みメニューのうち1つ以上行う生産者には、前記の奨励金が発動する際、1頭当たり1万円を加えて交付することとした。取り組みメニューは、発情発見機・分娩監視装置の活用(機器の購入、リース)、疾病防止のための適切なワクチン接種(母牛、子牛のワクチン接種)一など6つ。

同機構は10月7日、同事業の22年9月分の全国平均価格を公表した。乳用種は、前月に続き全国平均価格が発動基準Bを下回ったため、1頭当たり3万円の奨励金が交付される。黒毛和種は、九州・沖縄で発動基準Aを下回ったため、同1万円の奨励金が交付される。

## 豚枝肉

出荷頭数増も、  
相場は小幅な下  
げにとどまるか

9月の東京食肉市場の豚枝肉税込み平均単価は、上物が644円(前年同月比107%)、中物は634円(111%)となった。前月に比べ、上物は同単価、中物は9円上げた。残暑の影響で全国的に出荷頭数が増えず、高値を維持した。

農水省の肉豚生産出荷予測によると、10月は145万2千頭(前年同月比102%、平年比100%)、11月は146万1千頭(97%、100%)と平年並みで推移する見込み。

農畜産業振興機構の需給予測によると、10月の輸入量は総量で7万8千t(前年同月比100%)の見込み。内訳は冷蔵品3万1600t(94%)、冷凍品4

万6400t(105%)。冷蔵品は、北米における現地価格の高騰や為替相場の変動等が続いていることから、前年同月をやや下回ると予測。冷凍品は、前年よりも北米などからの輸入量の増加が見込まれること等から、前年同月をやや上回ると予測している。

季節的に肉豚の増体が進み、出荷頭数が増えることから、例年、相場が下がる。一方、冷蔵品の輸入量は円安等の影響で減少傾向が続く見通し。消費は、気温の低下に伴い鍋物需要が強まることが予想される。国産品の引き合いは底堅く、相場は小幅な下げにとどまるとみられる。

向こう1ヵ月の東京食肉市場税込み平均枝肉単価は、上物が600~630円、中物は570~590円での相場展開か。

## 素牛

### スモール

乳牛もちあい、  
和牛は導入控え  
で弱もちあいか

【スモール】9月の全国23市場の1頭当たり税込み平均取引価格(農畜産業振興機構調べ、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳雄が1万5142円(前年同月比17%)、F<sub>1</sub>(雄・雌含む)は8万8793円(49%)だった。前月に比べ、それぞれ1万6295円、1万1707円下げた。乳雄は北海道、都府県ともに続落となった。

飼料等の生産資材価格の高騰が長期化していることから、スモール価格は弱もちあいか。

【乳素牛】9月の乳素牛の全国1頭当たり税込み平均価格(左表、月末の取引結果を除く暫定値)は、乳去勢が

13万6800円(前年同月比55%)、F<sub>1</sub>去勢は34万5173円(93%)だった。前月に比べ、乳去勢は3408円下げ、F<sub>1</sub>去勢は1万8801円上げた。F<sub>1</sub>去勢は北海道で値を戻した。

両品種の枝肉相場は概ね堅調だが、飼料価格の高騰等から、素牛価格は弱もちあいか。

【和子牛】9月の和子牛去勢の全国1頭当たり税込み平均価格(同)は、65万2195円(前年同月比86%)となった。前月に比べ2万1758円下げた。4月から6ヵ月連続で前月価格を下回った。

和牛の枝肉相場は軟調に推移している。肥育農家が導入を控える動きが続くことが予想され、子牛価格は弱もちあいで推移か。